







Epidemiological study of the subtype frequency of systemic amyloidosis listed in the Annual of the Pathological Autopsy Cases in Japan

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 愛奈 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000179

学位論文審査の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	やまぐち あいな 山口 愛奈
学位論文題目	Epidemiological study of the subtype frequency of systemic amyloidosis listed in the Annual of the Pathological Autopsy Cases in Japan (日本病理剖検輯報に基づく全身性アミロイドーシス各病型頻度の疫学調査)		
審査委員	主査 小、林 基 弘		
	副査 平 工 雄 介		
	副査 内 木 宏 延		
<p>全身性アミロイドーシスは病型によってその臨床像が異なり、治療法を選択するためには正確な病型分類が重要である。本研究は、本邦の剖検症例における全身性アミロイドーシスの最新の病型頻度を明らかにすることを目的としている。</p> <p>2017年1月から2018年12月までに剖検された全身性アミロイドーシス症例のうち、「日本病理剖検輯報」の第60輯、第61輯に掲載された症例を解析した。病型が不明の症例は、アンケート調査、厚労省アミロイドーシスに関する調査研究班の保有する抗κ、抗λ、抗トランスサイレチンウサギポリクローナル抗体による免疫組織化学、及びプロテオーム解析を行った。</p> <p>結果として、「日本病理剖検輯報」の第60輯、第61輯には合計で481例の全身性アミロイドーシス症例が記載されていた。解析可能な症例は411例(85.4%)であり、最終的には399例が各病型へと分類可能であった。解析の結果、ATTR型アミロイドーシスが最も多く(44.4%, n=177)、次いでAL型アミロイドーシス(38.8%, n=155)であった。AA型アミロイドーシスとAβ2M型アミロイドーシスはそれぞれ9.3%(n=37)と6.0%(n=24)であった。アミロイドの二重沈着は1.6%(n=6)に認められた。全身性アミロイドーシスが主な死因であった症例は168例(42.1%)であり、これらの症例の中ではAL型アミロイドーシスが最も多く(47.6%, n=80)、次いでATTR型アミロイドーシス(41.1%, n=69)であった。</p> <p>日本における現在の剖検症例では、ATTR型アミロイドーシスが最も優勢であり、1990年代のデータと比較すると、その頻度は急激に増加している。最近、本邦の生検材料を用いた調査にて、ATTR型アミロイドーシスが日本における最も頻度の高い病型であることが明らかとなったが、これは本研究の結果と一致し、剖検症例の病型頻度が、日本における全身性アミロイドーシスの病型分布の現状を正確に反映していることを示している。申請者は、剖検症例におけるATTR型の優位性について以下のように説明している。第一に、日本人の長寿化に伴う高齢化が挙げられ、第二に、この疾患に対する認識の高まりがATTR型の増加に寄与していると考えられる。また、1990年代に得られたデータと比較すると、抗炎症薬剤の進歩などによりAA型アミロイドーシスの頻度が急激に減少しており、ATTR型アミロイドーシスの頻度が相対的に増加したものと考えられる。</p> <p>結論として、399例の全身性アミロイドーシスを分類した。ATTR型アミロイドーシスが最も多く、次いでAL型アミロイドーシスであった。全身性アミロイドーシスが主な死因であった症例は168例であり、AL型アミロイドーシスが最も多く、次いでATTR型アミロイドーシスであった。本論文は、現代の日本における全身性アミロイドーシスの病型頻度を全国規模で明らかにしており、今後の難病医療・行政の重要な根拠データとなり得る。</p> <p>以上の知見は、本学学位論文として十分価値あるものと認める。</p>			
(令和 6 年 2 月 8 日)			

最終試験の結果の要旨

※ 整理番号		ふりがな 氏 名	やまぐち あいな 山口 愛奈
学位論文題目	Epidemiological study of the subtype frequency of systemic amyloidosis listed in the Annual of the Pathological Autopsy Cases in Japan (日本病理剖検輯報に基づく全身性アミロイドーシス各病型頻度の疫学調査)		
審査委員	主査 小林 基弘 副査 平工 雄介 副査 内木 宏延	  	
<p> 上記の者に対し、<u>口頭</u>により、学位論文を中心とした関連分野について試問 筆答 を行った結果 <u>合格</u>と判定した。 不合格 </p> <p style="text-align: right;">(令和 6 年 2 月 8 日)</p>			